京都大学言語学懇話会
2006–2007 年度 活動報告

例会報告

第 72 回例会

日時・場所　2006 年 12 月 16 日 (土) 13:30–16:45 於京大会館

研究発表　「具体的発話への動詞の寄与—特にアスペクト的意味を通して—」
小西 正人 (北海道文教大学)

「モンゴル語雑感 — 「チンギス・カン碑文」と「元朝秘史」に言及して — 」
橋本 勝 (大阪外国語大学)

第 73 回例会

日時・場所　2007 年 4 月 14 日 (土) 13:30–16:45 於京大会館

研究発表　「チャック語における名詞化をめぐる諸問題」
藤原 敬介 (京都大学)

「文法化と形態・統語的仕組み — 日本語と朝鮮語の相違を引き起こす根本的要因 — 」
塚本 秀樹 (愛媛大学)

第 74 回例会

日時・場所　2007 年 7 月 14 日 (土) 13:30–16:45 於京大会館

研究発表　「チノ語悠楽方言の動詞連続構造について」
林 範彦 (神戸市外国語大学)

「中国語の語順と軽動詞 : 結果構文を中心に」
沈 力 (同志社大学)

具体的発話への動詞の寄与　― 特にアスペクト的意味を通して ―

小西　正人

Émile Benveniste は論文 “La forme et le sens dans le langage.” の中で、「文」や「語」が単位となる領域を sémantique な領域、「記号」が単位となる領域を sémiotique な領域とよび、言語の意味研究には両側面からの研究が不可欠であると述べた。本発表は、近年の意味研究が sémantique な領域に偏りがちであることを、アスペクト的意味研究を通して検証・修正しようというものである。

１．まず語彙項目（以下「語」）の意味について。Frege 以来「文の意味はその真理条件であり、語の意味は文の意味への寄与である」と言われるが、文意味や真理条件を「解釈」する場合、現実世界とのある種の「つながり」をもたないのであれば、それは単なる「翻訳」にしかならない。

文意味や真理条件を「解釈」できるというしるしのひとつに、眼前の状況に対して適切な描写を行うことができるという能力がある。この場合、どの語を選択するかはそれまでの知識に基づく。「食べる」という語に結びついている知識は「経口摂取」「体内消化による栄養摂取」「咀嚼を通じて体内に取り込む」などが考えられる。

しかし、新奇の状況はこれまでの知識を超える場合がある。その場合、新語の作成・語の新奇の組み合わせ・既存の語の非典型的使用などにより状況描写が行われる。後二者の場合、特に名詞や動詞などの語彙範疇系の語に結びつく諸知識は、絶対的本質的なものは殆どなく、諸知識間の相対的な重要性があるのみであり、描写される状況に応じて適宜取捨選択される。

２．次に動詞とアスペクト的意味について。「２時間」「どんどん」などのアスペクト的修飾表現との関係についての観察より「動詞が語として固有にもつ意味は、アスペクト的意味とは緊密な関係をもつが共起するアスペクト的修飾表現と直接的に関係せず、アスペクト的意味構造を通じて間接的に関係をもつ」ことがわかった。

３．以上の観察より、多くの動詞において原理的にはどれも否定可能である各諸知識をもとに派生産出されるアスペクト的意味は、動詞固有の意味として認めることはできない。また動詞と結びつく諸知識は文脈等によりすべて否定可能で、語の選択は最終的には他の語との競合により行われるというこの結論は、きわめて sémiotique な視点からのアプローチであると考えることができる。

（こにし　まさと）

モンゴル語雑感—「チンギス・カン碑文」と「元朝秘史」に言及して—

橋本　勝

「チンギス・カン碑文」とはウイグル文字で記された碑文でモンゴル語資料としては、最古の資料とされるものである。チンギス・カンの甥に当るイスンゲが弓技大会で優勝したのを顕彰して建立したもの。一般に 1225 年頃の作とされている。第 1 行目の Činggis qan の位置は、他の四行より上方に挙げて記されている。次のように読解できる。

(1)　Činggis　qan -i
　　チンギス・カン が
(2)　Sarta γul　irge　dauliǰu　ba γuǰu　qamu γ　Mong γol　ulus-un
　　回々の　民を　捕えて　降し　全　モンゴル　国　の
(3)　noyad -i　Buqa Suǰiqai　quri γ san –tur
　　領主が　ブカスジカイに　集った時
(4)　Yisüngge　ontudurun　γurban　ǰa γ ud　γučin　tabun　aldas
　　イスンゲが 射当てるには　三　百　三十五　尋(ひろ)
(5)　-tur　ontudl(u) γa
　　にて　射当てた

「元朝秘史」は、中世モンゴル語の最大の文献であり、モンゴル民族の最も誇るべき一大英雄叙事詩である。著作年代は通説では 1240 年とされる。当初、ウイグル文字で記されたが、後に明代になり漢字音訳された。ウイグル文字で記された後に元代にパスパ文字に書き換えられた可能性もあるが、詳らかではない。明代の漢字音訳本が残されているのみでウイグル文字原本は現在に至るまで発見されていない。ただ、17 世紀の蒙文年代記ロブサンダンジン著 *Altan Tobči* には「元朝秘史」の内容の 3 分 2 以上がほぼそのまま書き写されている。「秘史」第 56 節および第 240 節に興味を引く否定形式が認められる。

§56.　kei ö'ede kegül-iyen keyisümser ke'er qaǰar-a ke'eli-ben ölösümser büliyi.　keyisümser（傍訳「不曽刮」），ölösümser（傍訳「不曽飢」）の-mser が傍訳「不」からも否定接辞であることは明らか。keyis-ü-mser, ölös-ü-mser と分析できる。-mser は複合接尾辞-m は出動名詞接辞, -ser は否定接辞。この接辞の機能は化石的であるが、現代モンゴル語（ハルハ方言）xüüser「不妊の」に残されている。xüü「子, 息子」, -ser 欠性辞。

Altan Tobči にこれに対応する文が現れる。 Kei ögede kegül-iyen keyisügseger keger γaǰar-a kegeli-ben ölösügseger bülüge.

「秘史」の keyisümser, ölösümser は *Altan Tobči* では keyisügseger, ölösügseger と現れる。-mser は-gseger で置換えられている。-gseger は継続副動詞語尾であり否定の意味はない。これは、「秘史」の書かれた年代の 13 世紀頃は-mser に否定の意味が込められていたが、17 世紀頃には否定の意味を持つ接辞とは理解されにくくなっていたことを意味するものであろう。

「秘史」には一個所-mser の異形態-msar が現れる。

§240.　Boroqul noyan gürčü qurban haran yeke čerig-eče urida yabura odču üde ǰilda uqamsar berke hoi-tur horum-iyar yabuqun bolun…

uqamsar（傍訳「不覚」）は、uqa-msar と分析でき、uqa-「理解する, わかる」, -msar 否定接辞。

この文は、*Altan Tobči* に次のように現われる。 Boro γul noyan kürčü　γurban aran yeke čerig-ün urida yabur-a odču üde ǰilda uqamsar berke oi-dur orum-iyar yabuqun bolun…

「秘史」と同じく uqamsar は、そのまま記されている。ここでは否定の意味を含むものとして理解されていたと推測されようか。uqamsar は、14 世紀末頃の作「華夷訳語」（甲種本）にも現れ uqamsar（傍訳「不測」）には否定の意味が含まれている。

近代モンゴル語においては uqamsar は出動名詞で「意識」の意味で用いられ、否定の意味は存在しない。否定の意味を示すには uqamsar ügei のように否定詞 ügei を添えなければならない。この用法が近代以降一般化し現代に至っている。

（はしもと　まさる）

チャック語における名詞化をめぐる諸問題

藤原　敬介

チャック語はバングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵でチャック人によってはなされている言語である。チャック語は、系統的には、チベット・ビルマ語派のうちルイ語群に分類される。1991 年の統計によると話者数は 2000 人ほどである。

本発表ではチャック語にみられる名詞化について論じた。チャック語における名詞化は、動詞が名詞になるものにかぎられる。まずはじめに、接辞を付加することにより動詞が名詞になる現象について記述した。それから、名詞化を中心にもちいられる小辞 -GA について、さまざまな用法を記述した。-GA は、1. 名詞化、2. 関係節標識、3. 補文標識、4. 属格標識、5. 接続をあらわす従属節標識、6. とりたて詞、7. 未来時制の標識、といった機能をもつ小辞としてもちいられる。さらに、日本語でいう「のだ」文に相当するような用法もあることを報告した。

チベット・ビルマ諸語においては、チャック語にみられるように、名詞化をあらわす標識が多様にもちいられる現象がよくみられる。どのような言語で形態的にどのような標識がもちいられるかについても概観した。そして、チャック語の -GA は、チベット・ビルマ祖語で起点や所有をあらわすとされる小辞 *ga-i と関係しているであろうことをしめした。

（ふじわら　けいすけ）

文法化と形態・統語的仕組み
── 日本語と朝鮮語の相違を引き起こす根本的要因 ──

塚 本 秀 樹

本発表の目的は，次の二点である。第一に，日本語と朝鮮語における種々の形態や構文を取り上げて考察し，そういった諸言語現象に関する両言語間の類似点と相違点を明らかにする。第二に，両言語間のその相違は何を意味し，またどのように捉えるべきであるのか，ということについて対照言語学及び言語類型論からのアプローチで論ずる。

本発表で取り上げて考察した両言語における形態や構文は，「複合格助詞」「複合動詞」「『動詞連用形＋テイク／動詞連用形＋가다 <kata>（行く）』構文と『動詞連用形＋テクル／動詞連用形＋오다 <ota>（来る）』構文」「『動詞連用形＋テイル／動詞語幹＋고 있다 <ko issta>（～ている）; 動詞連用形＋있다 <issta>（～ている）』構文」「『動詞連用形＋テヤル；テクレル／動詞連用形＋주다 <cwuta>（～てやる；～てくれる）』構文」などであるが，これらの言語現象に共通し，両言語間のそれぞれの相違を引き起こしている根本的な要因として，日本語の方が韓国語よりも文法化が生じている，といった文法化の進度の違いを導き出すことができる。

また，「（接辞を用いた）使役構文」「複合動詞構文」「『～中（に）／～ 중（에）<cwung(-ey)>』『～後（に）／～ 후（에）<hwu(-ey)>』などを用いた構文」などの形態や構文について考察すると，これらの言語現象に共通し，両言語間のそれぞれの相違を引き起こしている根本的な要因として，朝鮮語では語なら語，節・文なら節・文といったように語と節・文の地位を明確に区別する仕組みになっているのに対して，日本語には語と節・文が重なり合わさって融合している性質のものが存在する，といった形態・統語的仕組みの違いを導き出すことができる。

さらに，この両言語間における形態・統語的仕組みの違いは，前述した両言語間における文法化の進度の違いを誘発する一要因になっていると考えられ，両者はこのように関係づけることが可能である。

結論すると，上記のことが根本にあるため，諸言語現象で両言語間の相違となって現れる。従って，文法化，さらには形態・統語的仕組みに着目することによって，諸言語現象における両言語間の相違を統一的に捉え，適切に説明することが可能となるのである。

（つかもと　ひでき）

チノ語悠楽方言の動詞連続構造について

林　範彦

本発表は発表者自身の現地調査による資料を用いて、中国雲南省景洪市で話されるチベット・ビルマ系ロロ・ビルマ語支のチノ語悠楽方言(以下、「チノ語」と略記)における動詞連続構造について記述を行った。

まず発表冒頭において、会場前面のスクリーンにてチノ(基諾)族の基本情報と現地の写真を紹介した。チノ族は 2000 年の人口統計で 20,899 人を数えるが、チノ語の流暢な話者は徐々に減少する傾向にある。チノ族はかつて焼畑を生業としていたが、現在は砂仁(Amomum)やゴムの栽培を生業とすることが多い。

次に本題となるチノ語の動詞連続構造を記述した。チノ語は動詞語根に接頭辞類・接尾辞類が付加される動詞複合形式(verbal complex)を形成する。チノ語の動詞連続構造は動詞語根が他の要素を何ら介することなく連続するタイプ(verb concatenation)であるため、接辞類は動詞連続構造の周辺に付加される。ここではまず、動詞連続構造を記述する際に必要となる動詞分類を設定し、自動詞/他動詞、意志動詞/無意志動詞を形式的・意味的に区別する。形容詞は動詞語根に接頭辞を付加した構造をとるが、動詞連続構造では語根部分のみが現れるため、本発表の対象に含める。

チノ語の動詞語根が 2 個連続する構造(V1=V2)を自動詞/他動詞の分類から見ると、自動詞=自動詞、自動詞=他動詞、他動詞=他動詞、他動詞=自動詞の 4 種類の組み合わせが見出せる。各組み合わせを意志動詞/無意志動詞の基準から見れば、自動詞=自動詞の動詞連続のみに意志=意志、意志=無意志、無意志=意志、無意志=無意志の 4 種類のパターンがある。他の動詞連続では意志=意志のパターンは必ず見られるものの、無意志=無意志のパターンは見られない。チノ語の動詞連続構造では基本的に各動詞語根の統語的要求項を併合する(argument sharing)が、自動詞=自動詞の組み合わせで一部項の併合が不可能である。各動詞語根の主語は基本的に同一であるが、特に V2 が形容詞の時は主語が異なる。また一般的に動詞語根は図像的に配置されるが、V2 に移動動詞が用いられた場合、一部時間的順序を V2≧V1 の順に解釈しなければならない場合がある。

最後に V1 と V2 の間に接続助詞 –mjə^{42} を置く場合を検討した。肯定文において主に「V1 と V2 の表す事態発生に一体性がない場合」、あるいは「項の併合ができない場合」に接続助詞 –mjə^{42} が置かれると結論付けた。

(はやし　のりひこ)

中国語の語順と軽動詞：結果構文を中心に

沈　力

中国語と日本語にはともに V_1-V_2 複合動詞があり、両言語の V_1-V_2 複合動詞には、以下のような事実が問題になる。まず、中国語と日本語には、ともに他動詞や非能格動詞間の複合および非対格動詞間の複合が可能であるが、[非対格動詞]-[他動詞・非能格動詞]の複合が不可能であるという共通性が見られる。さらに、日本語では、[他動詞・非能格動詞]-[非対格動詞]の複合が不可能であるのに対して、中国語ではそれが可能であるという相違点がある。

本研究では、以上の事実を説明するために以下の２つの仮説を提案する。

(1) 主動性調和原理(The Agentivity Harmony Principle：AHP)

V_1-V_2 複合語において、2つの動詞は主動性という点で調和しなければならない。(cf. Kageyama: 1996)

(2) “CAUSE”仮説

a. 日本語と中国語の V_1-V_2 複合語には共に CAUSE という述語が含まれるが、日本語ではそれが V_2 に含まれているが、中国語では軽動詞として生起する。

b. CAUSE は BECOME 述語を選択する。

すなわち、日本語でも中国語でも V_1-V_2 複合は AHP に従わなければならない。中国語では一見反例に見えるような[他動詞・非能格動詞]-[非対格動詞]の複合は、実は CAUSE という軽動詞を仮定することによって排除されうると説明できる。中国語の結果複合動詞(RVC)の構造は次のようになる。

(3) a. 張三　打死了　李四。 ‘Zhangsan hit Lisi and caused Lisi died. ’

b. [vP 張三 [VP 打$_{[+N]}$] [v’ CAUSE- 死$_i$ [VP’ 李四 [V’ t_i]]]]

(3a)の「死」とそれの対象である「李四」の語順は不規則である。その不規則性は(3b)に示されているように、拘束形態素である軽動詞 CAUSE によって引き起こされていると説明できる。さらに、(3a)の V_1「打」は様態を表す動名詞であり、付加成分であると分析することができる。

以上の仮説が妥当であることを示す根拠は５つあげられる。1. 可能マーカーが CAUSE を含む RVC に挿入できるが、CAUSE を含まない RVC に挿入できないこと。2. 原因使役動詞「使」と共起しない否定辞「不」は RVC とも共起しないこと。3. RVC の目的語である「李四」は V_1 の内項の振る舞いをしていないこと、4. ビンナン方言では CAUSE が ho という音声形式で表現され、その場合 head-movement が起こらないこと。5. 中国語には、軽動詞によって引き起こされる不規則語順はほかにもあることがあげられている。　(しん　りき)

「京都大学言語学研究」（27 号）の原稿募集について

京都大学言語学研究（27 号）の原稿を募集します。投稿される方は次の執筆要項によりご提出下さい。

執筆要項

1. 提出原稿

- 原稿種別は以下の通りとする。
  - 研究論文、研究ノート、懇話会要旨
- 完全原稿を提出すること。
- 印刷原稿、電子記録媒体（FD、MO、CD-R など）、もしくは電子メールでの投稿を受け付ける。別途用紙もしくは電子ファイルに以下の項目を記載して提出すること。
  - 題目
  - 執筆者名、ふりがな
  - 原稿種別（研究論文、研究ノート、懇話会要旨）
  - ページ数（要旨は含めない）
  - 所属機関
  - 連絡先（郵便番号、住所、電話・FAX 番号、e-mail アドレス）
- 電子ファイルで提出する場合は、PDF 形式で提出すること。
- 提出原稿に特殊なフォントが含まれている場合、当該フォントが埋め込まれている PDF で提出すること。
- PDF 以外のファイル形式で提出する場合は編集委員会までご相談下さい。

2. 研究論文

- **原稿枚数**　原則として、図表などを含め A4 版用紙 30 枚以内とする。これを超える原稿についても投稿を受け付けるが、採用された場合でも、掲載が 28 号以降になることがある。
- **文字のサイズ**　日本語論文は明朝体 12 ポイント（1 行 37 字程度）・1 ページ 35 行程度、欧文論文は Times 系 12 ポイント・1 ページ 35 行程度（1.5 スペース程度）とする。
- **原稿の余白設定等**　各ページのマージンを上下左右: 30、35、30、30mm とる。印刷原稿で提出する場合、ページ番号は印字せず、右下隅に鉛筆で記入する。
- **タイトルと氏名**　1 ページ目のはじめにタイトル（中央揃え）を入れること。タイトルは 14 ポイント太字とする。なお、タイトルの上部には 2 行分の余白を設け、タイトルと本文はじまりとの間に 4 行分の余白を設ける。匿名査読制のため、本文中に執筆者の氏名は入れないこと。また本人が特定できるような表現はできるだけ避けること。

- **注について**　注は通し番号をつけ、各ページの末尾におく。文字サイズは10から11ポイントとすることが望ましい。
- **要旨**　A4版用紙1枚の要旨を付ける。要旨は本文と異なる言語で書くのが望ましい。原稿のスタイルやタイトルと氏名の体裁については上記に準ずる。要旨文のはじまりの左上部に「要旨」「Abstract」等と太字で表記し、要旨文のはじまりとの間に1行分の余白を設けること。
- **採否**　編集委員会で決定し、原稿受付より二ヶ月以内に採否を連絡する。
- **原稿締切日**　原稿は随時受け付ける。ただし、2008年6月30日を過ぎて到着した論文については、採用された場合第27号ではなく、それ以降の号への掲載とする。

3. 研究ノート

原稿枚数、体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

4. 懇話会要旨

- 「京都大学言語学懇話会」での発表の要旨を掲載する。原稿枚数は、A4版用紙1枚とする。
- その他、スタイル等は、論文に準ずる。
- 原稿締切日は、発表当日とする。

5. 連絡先

投稿は下記住所にて受け付けます。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科言語学研究室
電話 / Fax: (075) 753-2827
電子メール: KULR-edit@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

6. その他

- 原稿及び電子記録媒体は原則として返却いたしません。
- LaTeXで執筆する場合は、上記の書式に合わせたスタイルファイルを用意していますので、編集委員まで御連絡下さい。
- 執筆者には、掲載号1部と抜き刷り20部を進呈いたします。20部を超えて希望される方には実費にて増刷を行うことができます。
- 第27号は、2008年12月発行を予定しています。
- 京都大学言語学研究室は、掲載原稿を電子的な手段で公開・配布する権利を有するものとします。
- 各著者が掲載原稿を電子的な手段で公開・配布する場合は、その出典（号数、ページ数）を明記して下さい。

執筆者紹介

Kim Ronald I.	Wrocław University
鈴木 博之	日本学術振興会 / 国立民族学博物館
淺尾 仁彦	京都大学大学院
別所 祐介	広島大学大学院
海老原 志穂	東京大学大学院
ツェリ ツォモ	
エブセーバ エレナ	京都大学大学院

編集後記

『京都大学言語学研究』第 26 号の発行に際し、三藤博氏、Szymon Grzelak 氏、林範彦氏、鈴木博之氏、また多くの方々に協力していただきました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

この度、執筆要項に変更を加えました。詳しくは原稿募集のページをご覧下さい。皆様のご投稿をお待ちしております。今後とも『京都大学言語学研究』をよろしくお願いいたします。

編集委員長

『京都大学言語学研究』 第26号
Kyoto University Linguistic Research Vol. 26

2007年12月25日 発行

編集委員長 ワンプラディット・アパサラ・キク
副編集委員長 金 京愛　富田 愛佳
編集委員 淺尾 仁彦　エブセーバ・エレナ　越智サユリ　金澤 雄介
川田 拓也　佐藤 昭裕　白井 聡子　スタニアク・シルビア
高橋 淳一　田窪 行則　田村 早苗　中村 千衛　林 由華
稗田 乃　松本 亮　藪 司郎　山崎 瑤子　吉田 和彦
吉田 豊　（五十音順）

発行者 京都大学大学院文学研究科言語学研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話: (075) 753-2827　http://ling.bun.kyoto-u.ac.jp/

Edited by
Wungpradit Apasara Kiku　Kim Kyung-ae　Tomita Aika
Asao Yoshihiko　Evseeva Elena　Ochi Sayuri　Kanazawa Yusuke
Kawada Takuya　Sato Akihiro　Shirai Satoko　Staniak Sylwia
Takahashi Jun-ichi　Takubo Yukinori　Tamura Sanae　Nakamura Chie
Hayashi Yuka　Hieda Osamu　Matsumoto Ryo　Yabu Shiro
Yamazaki Yoko　Yoshida Kazuhiko　Yoshida Yutaka

Published by
Department of Linguistics
Graduate School of Letters, Kyoto University
Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto
606-8501 Japan

© 京都大学言語学研究室 2007 Printed in Japan
ISSN 1349-7804

ISSN 1349-7804

京都大学言語学研究

第 26 号

論 文

Vowel Weakening in Tocharian A
Preterite Participles and Abstract Nouns ..... Ronald I. Kim 1
川西民族走廊・チベット語方言における「ぶた」を表す語 ..... 鈴木 博之 31
意味の重ね合わせとしての日本語複合動詞 ..... 淺尾 仁彦 59

研究ノート

チベット語天祝方言とその言語使用状況について .... 別所 祐介 , 海老原 志穂 77
カムチベット語維西 [Melung] 方言の
r 化母音とその来歴 ..... 鈴木 博之 , ツェリ ツォモ 93
Wh 疑問要素の生起位置と解釈
— 英語および日本語と対照したロシア語の特徴 — ... エブセーバ エレナ 103

京都大学言語学懇話会 2006–2007 年度活動報告 131

2007
京都大学
大学院文学研究科
言語学研究室

Kyoto University Linguistic Research

Vol. 26

Articles

Ronald I. Kim:
Vowel Weakening in Tocharian A
Preterite Participles and Abstract Nouns 1

Hiroyuki Suzuki:
'Pig' in Tibetan dialects spoken in the Ethnic Corridor of West Sichuan 31

Yoshihiko Asao:
Japanese compound verbs as superimpositions of meaning 59

Notes

Yusuke Bessho and Shiho Ebihara:
dPa's ris Dialect of Tibetan and its Language Use 77

Hiroyuki Suzuki and Tshering mTshomo:
R-coloured vowel and its origin in Melung [Weixi] dialect
of Khams Tibetan 93

Elena Evseeva:
On the distribution and interpretation of Wh-elements in Russian
— as contrasted with English and Japanese— 103

The annual report of Kyoto University Linguistic Colloquia 2006–2007 131

2007

Department of Linguistics
Graduate School of Letters
Kyoto University